



御堂筋のあたり

絵・文 熱田親憲

東洋陶磁美術館における取材の結果、先週は陶磁器に関する基礎知識編で終わってしまったので、今週は鑑賞編でまとめたいと思う。取材に立ち会っていた主任学芸員の野村恵子さんに、早速、陶磁器の鑑賞ポイントを伺った。

「こちらからのおしつけではなく、本当は自由に見ていただきたいのですが、あえて言うならば釉の色合い、形の美しさ



やおもしろさ、文様の多様性などでしょうか。ただ、感じ方は人それぞれですし、楽しみ方もその人の来館目的によって異なりますが、「目的ってそんなにあるの?」「美術館に来られる方はさまざまです。場所柄、ビジネスマンの息抜き、国内外の美術系大学生の見学や旅行、もちろん焼き物や美術愛好家、偶然通りがかったという方などです。東京などの遠方や、海外からわざわざ来られる方もおられます」

次に館内の展示内容についてお聞きした。「館蔵品の中心は、安宅コレクションの中国・韓国陶磁と李秉昌コレクションの韓国陶磁です。美術館の開館後、日本陶磁の収集も始めました。常設

展示としては中国・韓国・日本の作品を約300点展示し、それぞれの焼き物の歴史を紹介しています。現在は、特別展を開催中のため、常設展示は約150点となっています」

感じ方は人それぞれ

。騎馬人物文皿などは、三国志に登場する人物を思わせ、親しみを感じた。向付の茶道具などには、釉薬のはく落などが見られ、日本のわびさびに通じるものを感じた。

いよいよメイン会場の安宅コレクションとの出会いである。中国陶磁器と韓国陶磁器が主で、多数の作品がいろいろなか、野村さんに基礎知識が、野村さんに基礎知識の補足をいただいた。この形で自宅でのホームページ鑑賞ができると思うと、うれしくなった。

れたという。政治と文化が分離してよかったと思いつつ鑑賞に入った。目に入った作品は邪気をはらう鬼面瓦、青磁の唾壺、楊貴妃の連枝の枝を思わせる文様などで、ともに生活感が共有できて親しみを覚えた。

次の会場は「古染付の魅力」コーナーで、日本に輸入された中国・明時代の青花磁器たちである。全体の流れを把握することに努めた。器の種類では、碗、壺、鉢、瓶、梅瓶、水注などが目につき、釉薬と顔料による文様の色合いでは、青花、鉄砂、辰砂が目にとまった。釉薬による器の表地の色としては、白磁と青磁の器がシンプルで清楚、高貴な印象を与えてくれた。彫って文様を表すものでは透かし彫りしか見抜けなかった。